

『終末卒業旅行』

土橋淳志

登場人物

- 藤村環希（被災時卒業生、A班、演劇部元部長）
今泉織江（被災時卒業生、B班、元副部長）
秋元万里（被災時卒業生、A班、照明チーフ）
宇田川円佳（被災時卒業生、A班、先輩と思われていない先輩）
菊池美波（被災時二年生、A班、両親が蓬莱島出身）
小宮梨香子（被災時二年生、A班、二年のムードメーカー）
松島純奈（被災時二年生、B班、演劇部新部長、織江を慕っている）
渡辺綾乃（被災時二年生、B班、『尺には尺を』を上演したい）
水野奈津（被災時二年生、A班、釣りが趣味）
橋千早（被災後に島を訪れたクルーザーに乗っていた女性、美容師）
佐々木葉月（貴士の姉、八丈島から逃げてきた）
佐々木貴士（葉月の弟、八丈島から逃げてきた）
佐々木修一郎（葉月と貴士の叔父、蓬莱島で自給自足の生活をしている）

※被災一年後、A班は民宿、B班は民家に住んでいる。

第一幕

東京から南へ数百キロ。伊豆諸島最南端の有人島、蓬莱島。三月末。

海辺に立つ民宿。その一階ロビー。大きなテーブルが二卓に椅子、ソファ、カラオケ大会用の小さなステージ、姿見（スタンドミラー）。中央奥に下駄箱と玄関、受付カウンター、カウンターの奥にはバックヤードに通じる暖簾のかかった出入り口。上手には二階への階段と一階建物の奥に通じる廊下、その間にはピアノ。下手は庭に面していて建具を解放すると縁側（くれ縁）のようになる。庭には椰子の木が一本生えていて、民宿から浜辺に向かうにはこの庭を通ると近道。

波の音が聞こえている。

ロビーのテーブルで環希がノートパソコンで作業をしている。手元には大量のレシートなど。庭で美波が修一郎と話をしている。

修一郎

これ、もしよかったらお土産に。

美波　こんなにたくさん、いいんですか？

修一郎　いいのいいの、今年はずっとたくさん作りすぎちゃったから。

美波　ありがとうございます。

修一郎　それじゃ、みなさんよろしく。

修一郎、立ち去る。

美波、カゴを抱えてロビーに入ってくる。

環希　誰か来てたの？

美波　近所の人だ。この島で自給自足の生活をされてるそう。

環希　自給自足、そんなことが成立するんだ。

美波　それでコレ持ってきてくれたんです。皆さんのお土産につて。

環希　なに。

美波　サツマイモ。

環希　へー、島ってほしいイモだよ。

美波　そうなんです。

環希　ほら、ポリネシアのタロイモとか。

美波　そういえば子供の頃、よく食べたような気がします。この島で。

そこへ、二階から織江がやって来る。

織江　環希、ごめん。

環希　どうしたの？

織江　買い出しのレシートまだ一枚残ってた。清算、間に合う？

環希　もう締め切りました。

織江　そこを何とか。

環希　しょうがないなあ。

美波　織江さん、これ見てくださいよ。

織江　なに、イモ？

美波　近所の人を持ってきてくれたんです。皆さんのお土産につて。

織江　へー、ちょっといい？

美波　何ですか？

織江、スマートフォンでイモを持っている美波の写真を撮る。

美波　何で写真撮ったんですか？

織江 いやー、美波ってイモが似合うなって思っ

美波 どういう意味ですか？

綾乃 「厳正に処分するのが、最も多く慈悲を施す所以なのである。罪人をそのまま放免すれば、後日更に、何十人を苦しめるやらはかられんから、二度と同じ罪を犯させないために、第一回の際に処分してしまうのである」

綾乃、コンクリートブロックを両手に下げてシェイクスピア『尺には尺を』の台詞をブツブツ呟きながら庭を通り過ぎて浜辺の方へ。綾乃はまだ寒いはずなのに部活のTシャツを着ている。

美波 …大変そうですね。清算。

織江 そんなにきつちりしないでいいんじゃない。

環希 そういうわけにはいかないでしょ。お金で揉めるのが一番つまらないから。

織江 私だったら少し大目を集めて余ったら幹事代としてもらっておくけどな。だって飛行機やフェリーの手配は全部、環希がやってくれたんだから。

環希 好きでやってることだから。それに最近思うのよね、演劇の演出って、ツアーコンダクターと似てるなって。みんなを楽しく安全に目的地まで連れて行かないといけないわけでしょ。だから計画性と準備が大事。できた。

織江 うーん、結構、いったね。花火、買すぎたんじゃないの？

環希 食費も一週間だからね。でも、その分みんなも楽しんだでしょ。

織江 まあね。海に入れなかったのは心残りだけど。

環希 まだ3月だからね。

綾乃 「厳正に処分するのが、最も多く慈悲を施す所以なのである。罪人をそのまま放免すれば、後日更に、何十人を苦しめるやらはかられんから、二度と同じ罪を犯させないために、第一回の際に処分してしまうのである」

綾乃、『尺には尺を』の台詞をブツブツ呟きながら浜辺から戻って来て庭を通り過ぎる。

環希 …ほんとありがとね、こないいいところ連れてきてくれて。

美波 いえ、先輩方には非来てもらいたかったの。

織江 もつたいないよね。まだ十分営業できるのに。

美波 おばあちゃんも、もう年なので。それにここはちょっと遠すぎますよね。東京から飛行機で一時間、フェリーで五時間ですから。お客さんも少なくなってきたみたいで。

環希 おばあさんは今、埼玉？

美波 ええ、1月から同居してます。

環希 まあ、その方がいいかもね。ここ病院もないだろうし。

美波 でもよかったら、また来てくださいよ。今度は夏に。

織江 え？ 閉めるんじゃないの？

美波 お二人が来るなら開けますよ。今回同様、臨時の女将としておもてなしします。だって、ほんとは卒業旅行って話だったのに申し訳なくて。

織江 …私は、いいけど。

美波 そっか。環希さんは北海道の大学に行くんですね。

環希 うん、いやー、申し訳ない。

織江 何でそんな北の果て行っちゃうかね。

環希 札幌は北の果てじゃないよ。

織江 私にとっちゃ似たようなもんだよ。

綾乃 「厳正に処分するのが、最も多く慈悲を施す所以なのである。罪人をそのまま放免すれば、後日更に、何十人を苦しめるやらはかられんから、二度と同じ罪を犯させないために、第一回の際に処分してしまうのである」

綾乃、コンクリートブロックを両手に下げてシェイクスピア『尺には尺を』の台詞をブツブツ呟きながら庭を通り過ぎて浜辺の方へ。

織江 さっきから何なのあれ。

梨香子 ああ、もう、前が見えないんだけど。

続いて、梨香子がバーベキューの道具を山のように抱えて庭へやって来る。

織江 梨香子、何してんの？

梨香子 見てわかりませんか？ バーベキューの準備ですよ。

織江 それはわかるけど、ちょっと早くない？ さっきお昼ご飯たべたばかりでしょ。

梨香子 純奈に言ってくださいよ。私だって好きでやってるわけじゃないんですから。

純奈と円佳、それぞれバーベキューの道具を持って庭へやって来る。純奈もまだ寒いはずなのに部活のTシャツを着ている。

梨香子 純奈、準備するの、ちょっと早いんじゃないって。

純奈 いえ、何事においても準備は早いに越したことはありません。それに、織江さんも言ってたじゃないですか、私たち二年には主体性が足りないって。それで私、部長として考えたんです。今夜のバーベキューを先輩方の手を借りずに、二年だ

けで準備してみようって。最近思うんですよ、演劇を作るのって、バーベキューと似てるんじゃないかって。無造作に焼いているように見えて実は緻密な計算があるわけじゃないですか、具材をどの様に生かすかとか、焼く順番とか。なので先輩方はそちらで御ゆるりと。私たちが…。

そこへ、釣竿とクーラーボックスを持った奈津、一階の廊下奥から登場。

純奈　ちょっと、奈津、どこ行くの？

奈津　いやー、ちょっと、バーベキューの具材を増やそうかと。

奈津、急いで玄関へ。純奈が立ち塞がる。

純奈　今朝たくさん釣って来てくれたじゃない。べらばっかり。

奈津　だから、もっと大きなやつを。

純奈、奈津に襲いかかり釣竿を力づくで奪い取る。

奈津　わあ、ちょっと、やめて、乱暴に扱わないで、それ高いんだから。

そこへ、二階から万里がやって来る。

純奈　返してほしかったら、そのクーラーボックスに飲み物と保冷剤入れて持ってきて。

今、私たち二年の結末が試されてるの。わかる？

純奈、浜辺の方に立ち去る。

奈津　わかったから、それ絶対、砂浜に直に置かないでね、壊れるからー！

梨香子　あんたも純奈の性格知ってるでしょ、さっさと諦めた方がいいよ。

奈津、仕方なくクーラーボックスを担いで一階奥へ立ち去る。

万里　なに、もうバーベキューの準備はじめたの。

環希　うん、そうみたい。

万里　はやくない？　まだ全然お腹減ってないんだけど。

美波　純奈が張り切ってるんです。

万里　ああ、織江が昨日余計なこと言ったから。

織江 なに私のせい？

梨香子 私たちとしてはかなり迷惑なんですけど。万里さん、手伝ってくださいよ。

万里 えー。

環希 せっかく純奈がああ言ってるんだから。できるところまで自分たちでやってみたら。

梨香子 もう、織江さん、恨みますよ。

梨香子、浜辺の方に立ち去る。

織江 私が悪いの？

円佳 いいんじゃないの。純奈、部長として環希と比較されて悩んでるみたいだったから。

環希 そんなの気にしなくていいのに。

円佳 できる人にはわからないんだよね。

万里 それで、円佳は卒業生なのに何で手伝ってるわけ？

円佳 いやー、何とかという流れで。ほら私、二年から入部したからあんまり先輩と思われてないみたいなんだよね。

円佳、浜辺の方に立ち去る。

綾乃

「厳正に処分するのが、最も多く慈悲を施す所以なのである。罪人をそのまま放免すれば、後日更に、何十人を苦しめるやらはかられんから、二度と同じ罪を犯させないために、第一回の際に処分してしまうのである」

綾乃、『尺には尺を』の台詞をブツブツ呟きながら浜辺から戻って来て庭を通り過ぎる。

美波

ほんと何かすみません、二年がうるさくて。卒業生のみなさんには、もっと静かに、落ちついた感じで最後の思い出、つくってほしかったんですけど。

織江

私たちは別にいいんだけど。それよりこの時期に遊んでて大丈夫なの？ 新入生歓迎公演まで、もうあんまり時間ないよね。

美波

それが昨日、やっと演目と配役が決まったんです。

万里

ああ、昨日、二年だけで集まったのはそれか。なにやるの？

美波

シェイクスピアの『尺には尺を』です。同じシェイクスピアの『あらし』とどっちにするかもめたんですけど。

綾乃

「厳正に処分するのが、最も多く慈悲を施す所以なのである。罪人をそのまま放

免すれば、後日更に、何十人を苦しめるやらはかられんから、二度と同じ罪を犯させないために、第一回の際に処分してしまうのである。是非がないと諦めるがいい。兄貴の命は明日限りだ。諦めなさい」

綾乃、コンクリートブロックを両手に下げてシェイクスピア『尺には尺を』の台詞をブツブツ呟きながら庭を通り過ぎて浜辺の方へ。

美波
それで綾乃がアンジェロ役をすることになったので、今、ああいう感じになってるんだと思います。

織江
『尺には尺を』ってどういう意味？

美波、助けを求めて環希を見る。

環希
えーっと、「あなたが裁くとおりに、あなたも裁かれ、あなたの量るとおりに、あなたも量られるだろう」だったかな。まあ、目には目を、歯には歯を、ぐらいでいいんじゃないかな。

美波
そ、そうですね。

万里
シェイクスピアといえばさ、一年生の時の文化祭でやったよね。『B L ハムレット』

美波
私それ脚本読みました。原案が万里さんで。脚本と演出が環希さん。

万里
織江がハムレットで、環希がホレイシヨ、私がレイアーティーズ。

美波
その三人の三角関係の話なんですよ。

万里
そうそう、公演が終わって、織江が演劇部、辞めるとか言い出して大変だったよな。

美波
え、どうしてですか？

織江
：演劇が性に合わなかったから。

万里
それでよく卒業まで続けたね。

織江
うん、ほんと、何でだろうね。

梨香子、走って浜辺から戻って来る。

梨香子
あの、ちょっといいですか、
万里
どうしたの？

梨香子
純奈に任せておいたら大変なことになりますよ！ 火の起こし方とか私から見てもかなり危なっかしいんで。このままだと大惨事になりますよ！
万里
大げさだなあ。

環希 うーん、でも火傷とかされると困るかな。万里、ちょっと行ってきてくれる？
万里 えー。

梨香子 とにかく早く来てください。美波も何しれっとそこに混ざってるわけ、あんたも二年でしょ、手伝ってよ。
美波 はーい。

梨香子、浜辺の方に走り去る。
円佳と綾乃、浜辺から走って戻って来る。

円佳 環希、ちょっと、私のレシート見せてくれる？ イオンのレシート。

環希 どうしたの？

綾乃 タレがないんです、焼き肉のタレが。

万里 え？

円佳 冷凍の肉と一緒に買ったはずなんだけどなあ。

綾乃 僭越ながらこれは一大事ですよ。このスーパーもコンビニもない絶海の孤島でバーベキューをしようというのに焼き肉のタレが無い。バーベキューなんてほとんどタレを食べているようなものですからね。
うるさいな。わかってるよ。

円佳 (レシートを見て)買ってないね。

環希 うそ。どうしよう。

環希 焼き肉のタレなら作れるんじゃない？ ここにある材料で。

美波 (スマホで検索しながら)はい、たぶん作れると思います。やってみましょう。

織江 (綾乃にイモを示して)ついでにそれも切ってきて。焼いたら美味しいと思う。
綾乃 はい。

美波と円佳と綾乃、一階奥の台所へ立ち去る。

万里 さてと、じゃあ私も、最後の最後にバーベキュー仕切って、先輩としての威厳を見せてきますか。

環希 よろしく。

万里 なんかさ、あつという間だったよな。三年間。

環希 …。

万里 あれ、なんかごめん。終わりっぽい空気つくっちゃって。

環希 いいよ。ほんとに終わりだから。これで。私たち。演劇部としてはね。

万里 あ、でも、一人、足りなくない？ 円佳。

環希 いいんじゃない、最後まで円佳らしくて。

万里
そうかもね。

万里、玄関から庭に出ると、心配そうに振り返る。浜辺の方に立ち去る。
ロビーには環希と織江が残される。

織江
：あーあ、嫌になるな。みんな、最後最後って。

環希
仕方ないじゃない。何でもそうだけど、いつかは終わりが来るよ。

織江
ほんと、あの時にやめとけばよかった、演劇部。

環希
最後まで付き合ってくれてありがとうね。

織江
何で北海道なの？

環希
受かったから。

織江
そうじゃないでしょ。

環希
：お母さんがね、外に男つくってね、それでも離婚しないんだって。これで満足？

織江
何で相談してくれなかったの。

環希
相談したとして織江に何かできることあった？

織江
私は、環希に話聞いてもらえて助かったけど。

環希
お父さん、最近どうなの。

織江
最近は、まあ落ち着いてるかな。

環希
よかったじゃない。でも、それは私が何かしたわけじゃなくて、たまたまそうなっただけなんだよ。

織江、小さな包みを取り出す。

織江
これ、餞別。

織江、小さな包みを投げる。環希、それを片手で受け止める。

環希
：私、プレゼントもらうの嫌いだって知ってるでしょ。

織江
じゃあ、海にでも捨てていい。

織江、環希の手から小さな包みを奪い返すと、自ら開ける。

環希
ちょっと、何してるの。

織江
中身見ないまま捨てられたら癪だから。

プレゼントの中身はイヤリング。
織江、姿見の前に椅子を動かす。

織江
こっちきて。

環希
だから私は何も受け取らないって言ってるでしょ。
いいから。

環希
…。

環希、姿見の前に置かれた椅子に座る。

織江、環希にイヤリングをつける。

波の音。

織江と環希、姿見に映った自分たちを見つめる。

織江
…この時間が、ずっと続けばいいのに。

突然、テーブルの上に置いてあった織江と環希のスマートフォンから、無気味な警報音が鳴り響く。織江と環希、顔を見合わせると、それぞれのスマートフォンを取りに行く。

織江
(画面を見つめて)何これ。

環希
…。

ゆっくりと暗くなる。スマートフォンから警報音に続いて音声流れる。

音声

ミサイル発射、ミサイル発射、国外からミサイルが発射されたものと思われま
す。建物の中、または地下に避難してください。

警報音、徐々に大きくなる。

暗転。

第二幕

第一幕から約一カ月後。

蓬莱島の民宿、その一階ロビー。

夜。蛍光灯の明かりの中、演劇部のメンバーより少し年上らしき女性(千早)と織江と純奈がテーブルで話をしている。千早のそばには大きな旅行鞆。同じテーブルで奈津が釣りの仕掛けを作っている。美波がソファに一人、座っている。賑やかな音楽が遠くの港の方角から、ここまで聞こえている。

純奈　ほんと急ですね。

千早　そうなの。

織江　他の皆さんは？

千早　もうクルーザーに。私が最後。

織江　そうですか。

純奈　…相変わらず賑やかですね。

千早　たぶんもう飲んでるのよ。

純奈　え？　大丈夫なんですか？　飲酒運転、ではないか、船の場合何て言うのかわかりませんけど。

千早　大丈夫でしょう。ごめんね、いろいろ嫌な思いさせちゃって。

純奈　いえ、千早さんが謝ることじゃないですよ。

千早　あの人も悪い人たちじゃないんだけど。ちょっと我儘というか。今まで思い通りにならなかったことが無いから。

織江　出航は朝なんですよ。それまでここにいてもらっていいんですけど、千早さんだけでも。

千早　それがいろいろあって、夜のうちに船に乗るように言われてるから。

織江　そうですか。

純奈　あの、これもしよかったら、

千早　え？

純奈　私と、(美波の様子をうかがいつつ)美波で作ったんです。

純奈、瓶詰(野菜のピクルス)を千早に手渡す。

純奈　常温で保存できるので。

千早　でも、食料はたくさんもらったはずなのに。

純奈　これは千早さんに特別に。みんなの髪切ってくれたお礼です。

千早　…それじゃあ、ありがたく頂戴します。

織江　あ、そうそう、まだ渡すものがあるんです。

純奈　え？

織江、純奈に目で合図する。

純奈 ああ、ええ、そうでした。

織江 奈津、ちょっと。

奈津 何ですか。いま大事なところなんですけど。

織江 いいから。

織江と純奈、奈津を強引に一階奥へ連れ去る。

千早と美波、二人つきりに。

千早 そっち行っている？

美波 いいですけど。

千早、美波の座っているソファの付近に。

千早 いろいろお世話になりました。

美波 こちらこそ。

千早 少しの間だけだったけど、楽しかった。

美波 私です。

そこへ、二階から万里と梨香子と円佳が降りてくるが、二人の様子に気づき、手信号でやりとりをして二階へ引き返す。

美波 みんなの髪切ってくださいって、ありがとうございました。

千早 みんなそればかり言うね。もつとちゃんとしたハサミがあればよかったんだけど。

美波 いやほんと、喜んでましたから。こんな状況ですけどみんな女の子ですし。

千早 ねえ、

美波 なんですか。

千早 みんなここに残るってことで本当にいいの？ 全員は無理でもあと何人か乗れると思うけど。

美波 それはもう話し合って結論ができましたから。ここで助けを待とうって。

千早 助けは、来ないかもしれないよ。

美波 …。

千早 あれから一カ月以上たつのに、ネットも電話もつながらない。

美波 …。

千早 水平線が光ったの。夜だったのに昼間みたいに明るくなって。すごい音がして。

ハワイには米軍基地があったから。最初は何が起こったのかはわからなかったけど、近くの船と連絡を取り合って、核戦争が起こったんだって。それで日本に引き返してきたんだけど。

…。

美波 千早 ねえ、よかったら、美波だけでも一緒に来ない？

美波 え？

千早 本土もどうなってるかわからないけど、ここでじっとしているよりマシじゃない？

美波 私一人だけ帰るわけにはいかないんで。私のせいなので。みんながここに閉じ込められたのは。私が、ここに連れてきたからなので。

千早 でもそれって、命の恩人なのかもしれないよ。

美波 そうかもしれないけど。みんなが家族と離れ離れになったのは事実なので。

千早 そっか。

美波 千早さんと別れるのは寂しいですけど。

突然、バチンという音と共にロビーの明かりが消えて真っ暗になる。

一階奥から声が聞こえる。

純奈 (声) え？ なに？ 停電？

織江 (声) みたいね。暗いから動かないで。

純奈 (声) はい。

一階奥から懐中電灯の明かり。

織江 (声) おお、助かる。

純奈 (声) よくそんなの今持ってたね。

奈津 (声) 夜釣りで使うんで。

懐中電灯を手にした奈津が先行してロビーに入って来る。

ソファの方を照らすと、美波が千早に押し倒されている。

奈津、慌てて引き返す。純奈と織江とぶつかりそうになる。

純奈 どうしたの？

奈津 いや、その、電池もったいないんで、蝋燭ないですかね。

純奈 蝋燭？

織江 たしか台所の引き出しにあったような。

純奈、一階奥の台所へ。

万里 (声)おーい。大丈夫か？

梨香子 (声)ちよっと、円佳さん、押さないてくださいよ。

円佳 (声)押してないよ。

そこへ、二階から万里と梨香子と円佳が手探りで降りてくる。

奈津、万里たちの方を懐中電灯で照らす。

織江 停電したみたい。

万里 だな。

織江 環希は？

万里 二階にはいなかったけど。

織江 え？

(台所から声)ちよっと奈津、こっち来てよ、蝋燭いるんでしょ。真っ暗でわかんないじゃない。

台所からドンガラガツシャンという音。

織江 純奈？

純奈 …大丈夫です。

織江 大丈夫じゃないでしょ、奈津が行くまでそこ動かないで。
純奈 はーい。

奈津、一階奥の台所に純奈を救出に向かう。

円佳 もしかして、ソーラーパネルが壊れたんじゃない。

梨香子 え？ それヤバくないですか。

円佳 ちよっと万里、見えてよ。

万里 何で私？

円佳 照明チーフでしょ。

万里 照明は電気屋じゃないよ。それに今は夜なんだから問題が発生してるとしたら配

電盤かバッテリーの方でしょ。

円佳 わかっているじゃない。

万里 でももしも、どっか壊れたとしたら修理なんかできないよ。

梨香子 え、じゃあこれからずっと電気無しの生活ですか？

織江 (大きな声で呼ぶ) たまきー。…どこいったんだろ。

梨香子 珍しいですね。こんな時にはいつもすぐ指示くれるのに。

純奈 (台所から戻って来て) 環希さんならイモおじさんのところに行くって言ってましたよ。夕方。今後の打ち合わせに。

織江 こんな時間まで？

万里 それより、イモおじさんに来てもらったらどうだろ。イモおじさんの家も太陽光発電でしょ。

円佳 あ、それいいかも。

織江 私行ってくるよ、みんなはここで待機してて。

万里 一緒に行こうか。

織江 一人で大丈夫。

綾乃 あの。織江さん、なに。

綾乃 それにはおよびません。

いつの間にかパジャマ姿の綾乃が話の輪に加わっている。

綾乃 何故なら私が原因だからです。

織江 え？

綾乃 さきほど私が風呂上りにドライヤーを使用してましたら、焦げ臭い臭いしてきまして、おかしーなー、おかしーなー、と思っていたら、ドライヤーの中からバチバチツツと音がしまして、このように停電したという次第です。

万里 ということはブレーカーか。

綾乃 おそらく。

織江 奈津、ちよつと来てくれる？

奈津 はい。

織江と奈津、カウンター奥のバックヤードへ。

梨香子 え？ じゃあドライヤー壊れたってこと？ ひとつしかないのに？

綾乃 残念ながら。形あるものはいつかは壊れる運命なのです。

織江 (声) 綾乃、ドライヤーのコンセントは抜いた？
綾乃 抜きました。

と、ガチャンという音がしてロビーの明かりが点く。

千早と美波は何事も無かったようにソファに座っている。

万里 お、ついた。

梨香子 あれ、美波たち、いたんだ。

美波 え、いたよ。

梨香子 全然、喋らないからどっか行ったのかと思ってた。

織江と奈津、戻って来る。

織江 やっぱり、ブレーカーだった。

円佳 良かったー、一時はどうなることかと。

万里 何でもっと早く気付かなかったんだろ。たぶん漏電してたんだな。

織江 千早さん、お騒がせしました。

千早 いえいえ、いいのいいの。

織江 (綾乃に)とりあえず、そのドライヤー持ってきて、
綾乃 はい。

綾乃、一階奥へ立ち去る。

織江 万里、直せるかどうか見てやってくれる？

万里 何で私？

織江 照明チーフでしょ。

万里 照明は電気屋じゃねーっの。

織江 私、イモおじさんの家に行って環希呼んでくるから、純奈、あとお願いね。
純奈 わかりました。

織江、玄関から外へ出て庭にまわる。

純奈 ほんとに一人で大丈夫ですか？

奈津 これ良かったら。

奈津、懐中電灯を織江に手渡す。

織江 ありがと。大丈夫。それじゃ行ってくるわ。

織江、立ち去る。

円佳 やれやれ。…美波。

美波 何ですか？

円佳 ちゃんと話しできた？

美波 話？

円佳 千早さんと。

美波 ええ、ああ、…はい。

円佳 なに、どうしたの？

千早 あの。

円佳 はい。

千早 お願いがあるんですけど。

円佳 何ですか？

千早 私を、ここに置いてもらえませんか？

みんな え？

美波、千早を見る。

千早 私、出て行くのやめようかなーって。

場面転換。

第三幕

蝉の声。

第二幕から約一年後。夏。蓬莱島の民宿、その一階ロビー。

環希、美波、綾乃、純奈、万里、円佳、梨香子、奈津、千早、つまり織江以外の全員が集合している。何やら会議の模様。千早以外、みんな部活のTシャツを着ている。テーブルの上には人数分のコップ。中身は井戸水。

純奈

えー、次に食料関係の報告ですね。えー、まず、魚ですけど、この一週間でB班割り当ての分、以上の分は、釣ることができましたので。詳しくは美波にきいてください。あと、ハウス栽培のイモですけど、これはもういつでも収穫できる状態にありますので、先ほど話に出たA班の分と、連携して、収穫する時期を決めたいと思います。えー、B班からはだいたい以上です。何かご質問は？ なければB班からの報告を終わります。

万里 はい。議題にはあがってなかったんだけどさ、そっちの家、雨漏りがひどいって
きいたけど大丈夫なの。

綾乃 そうなんです、この間の嵐で飛んできた木がぶつかって瓦が割れたみたいで。
ええ、でも大丈夫ですから。自分たちで直しますから。

万里 前から言おうと思ってたんだけどさ、そろそろ一度戻ってきたら？ この人数で
別れて暮らすのって効率よくないと思うし。なあ。

円佳 そうそう。

綾乃 それは私も言ってるんですけどね。

純奈 それは、今はまだ、ちょっと難しいですね。

環希 まあいいんじゃない。別々に暮らしてるけど、ちゃんところやって全体ミーティ
ングには来てくれるんだから。

純奈 そうです。それに分担された仕事はちゃんとやっています。

万里 別に責めてるわけじゃないんだけど。

純奈 わかっています。

環希 メンテナンスの面でも人が住んでた方がいいのよ。空き家にしとくのは良くない
から。ほんとは、おじさんが住んでた家にも誰か住んでもいいんだけど。まあそ
れは追々考えましようか。でも、雨漏りは直した方がいいと思うから、こっちか
らも手伝い出すよ。それは別にいでしょ。

：わかりました。

純奈 それじゃあ、最後に、全体を通して何か言い残したことはない？

千早 (手を挙げて)はい。明日、たぶんイモおじさんの命日だけど、お墓参り、行
きませんか？

万里 ああ、そっか、もう一年になるのか。

環希 いいんじゃないですか。

万里 まあそれは行かないとな。私たちがこうしていられるのもイモおじさんのお陰だ
から。

円佳 そうだよー。

純奈 あの、今さらですけどイモおじさんって呼び方やめませんか。

梨香子 じゃあ、何て呼んだらいいの？

純奈 確か、佐々木さん、だよー。

美波 そう、佐々木さん。

円佳 別にいいんじゃないの、イモおじさんで定着してるんだから。

梨香子 そうですよ、本人も喜んでましたし。

円佳 え、本人の前で言ったの？

梨香子 ええ、「イモおじさん♡」って。ニコニコしてましたけど。

円佳 梨香子、あんたね。

万里 まあ優しい人だったよね。

美波 そうですね。

環希 じゃあ、明日の午前中、みんなで行く？ お墓参り。それでいい。

みんな はーい。

梨香子 お墓参りって何がいるんでしたっけ。

円佳 えーっと、お線香でしょ。

美波 母屋の仏壇にありますね。

綾乃 お経とかあげた方がいいんですかね。

万里 うーん、お線香あげて、手を合わせるだけでいいんじゃない。

円佳 あと、お花。

万里 花か、花はなんとかなりそうだな。

千早 ハイビスカスなら今ちようど咲いてるけど。

万里 いいんじゃないですか。

円佳 お供え物は？

万里 普通はお菓子とかだけど、もう誰も残してないよね。

純奈 おじさんが好きだった食べ物でいいんじゃないですか？

万里 イモおじさんの好きな食べ物って何だっけ。

綾乃 はい。ニワトリのすき焼き。

円佳 ああ、あったあった懐かしい。あれ美味しかったよね。

梨香子 やめてください！

円佳 何で？

梨香子 思い出したくないんです。食べたくなくなるから。

円佳 そうだよな。しばらく食べてないよね、肉。

梨香子 あー、肉食べたい。

環希 じゃあこういのはどう？ 明日の晩御飯はニワトリのすき焼きっていうのは。

梨香子 え、いいんですか？

環希 確か少し余裕あったよね。

美波 はい、冬に生まれたのが大きくなってますから。

環希 じゃあ、奈津、またお願いできる？

奈津 (気乗りしない感じで)はーい。

綾乃 お砂糖と、お醤油は？ 入れるんですか？

環希 使ってもいいんじゃない、この際。

みんな「おおー」とどよめく。綾乃、拍手。みんなも拍手。

万里 明日はみんなですき焼きかー。

梨香子 楽しみですね。

円佳 すき焼きで喜ぶなんて何かすごい昭和な感じ。

綾乃 あと、久しぶりにレクリエーションなんてどうですかね。イモおじさん追悼公演ということで。

万里 なにそれ。

綾乃 まあまあまあ、演目は私にお任せください。

万里 ええ？

みんな、環希を見る。

環希 まあいいんじゃない。それじゃあ、これで全体ミーティング終わります。お疲れさまでした。

みんな お疲れさまでした。

環希 美波、B班の分、用意してあるよね。

美波 はい、台所に。

環希 純奈と綾乃、今週分の食料用意してあるから持って帰って。

綾乃 いつもいつも、ありがとうございまーす。

純奈 お礼なんて言わなくていいの、こっちだつて出すもの出してるんだから。あと、私、レクリエーションとかいうの、手伝わないからね。

などと話しながら、環希、純奈、綾乃、一階奥の台所に立ち去る。

美波と千早、テーブルの上を片付ける。コップをまとめて台所に持って行ったり、布中でテーブルの上を拭くなど。

円佳 綾乃、何する気なんだろ。

梨香子 嫌な予感しかしませんね。

奈津 はー、またこの時がやってきたか。

万里 どうしたの？

奈津 ひとつききたいんですけど、ニワトリばらすの何で私の仕事になってるんですか？

万里 いつも釣って来た魚、さばいてるでしょ。

奈津 気軽に言ってくれるなあ。あのですね、変温動物と恒温動物は違うんですよ、はじめてやった時、越えてはいけなない線超えた気がしましたから。

万里 だけどさ、環希なんて豚だよ、豚。あん時はさすがに引いたなあ。こいつには一生敵わんと思った。

奈津、バックヤードに立ち去る。

梨香子 あれはヤバかったですね。

円佳 私たち見てただけで、ほとんど環希一人でばらしてたからね。

梨香子 全身血まみれで。

円佳 思い出しただけでもグロイ。

万里 でも、あれが環希のやり方なんだよなあ。

円佳 やりかたって？

万里 いざという時、自分が一番ヤバイ橋渡るっていうか。

円佳 ああ、確かにそういうところあるよね。

奈津 はいはい、ニワトリごときでゴチャゴチャ言っただけで申し訳ありませんでした。

奈津、バックヤードから包丁と砥石の入ったケースを持って戻って来る。万里たちから少し離れた場所で包丁を研ぎ始める。

テーブルの上を片付け終わった美波はカウンターの途中で何か帳簿のようなものを書いている。

千早 円佳、お供えの花、一緒に取りに行かない？

円佳 え、ああ、うん。

千早 じゃあ準備して来るね。

円佳 うん。

千早、一階奥へ立ち去る。

万里 いやー、せっかくだからもっと潤いのある話しませんか。

梨香子 潤いのある話ってなんすか？

万里 円佳、最近どうなの？ 千早さんとは。

円佳 え？

万里 これからデートでしょ。お花を摘みに行くんですよ。

円佳 (浮かない感じで)デートと言えば、デートかな。

万里 なに、そのリアクション。

円佳 実は今日が最終日だよな。

万里 ああ、そっか、そういえばそろそろ三か月か。

梨香子 何ですか最終日って？

万里 三か月って約束なんだって、円佳と千早さん。

梨香子 え？

円佳　私から提案したんだけどね。「三カ月だけ私と付き合ってもらえませんか」って、そっちの方が千早さんも気楽かなって思っ
万里　なに後悔してるの？
円佳　するでしょ。
万里　まあ、そうか。
円佳　あつという間だったなあ。
万里　私の時も三か月くらいだったかな。梨香子は？
梨香子　二週間くらいですかね。
万里　美波の時は？
美波　：私は、半年くらいだと思います。
万里　ということは順番に、（美波を指さして）六カ月、（自分を指さして）三か月、（梨香子
を指さして）二週間、（円佳を指さして）三か月。こう考えるとほんと目まぐるしいよな。
梨香子　私の二週間で納得いきませんけどね。
万里　インターバルほとんど無しで毎回、カットクロスみないな感じか。
梨香子　照明用語で例えるのやめてもらえませんか？
万里　フェードクロスよりはいいでしょ。
梨香子　それはそうですけど。
円佳　やっぱりさ、落ち込む？　別れた後。
万里　そりゃあねえ。梨香子の時は特に大変だったよな。落ち込みっぷりが。
梨香子　いやいや、万里さんの時みたいでしたよ。
万里　え？　そうだっけ。面には出さないようにはしてたんだけど。
梨香子　バリバリ出てましたよ。千早ロスが。
円佳　でもわからないよね。もしかしたら延長って可能性も。
万里　ないね。
梨香子　ありませんね。
円佳　そんなのわからないでしょ。私たち、今けっこうラブラブなんだから。
万里　それさ、元カノ三人の前で言う？　ないの気遣いとか？
円佳　：昨日も部屋でさ。
万里　聞きたくないから。
円佳　だったらもつとこう励ましてよ。友達が不安になってるんだから。
梨香子　千早さん、何ていうか最後はけっこうあっさりしてるんですよ、付き合うのも
うまいけど、別れるのもうまいっていうか。
円佳　私の話聞いてた？
万里　そうなんだよなあ。

美波、帳簿を音を立てて閉じると二階へ立ち去る。

万里 (ばつが悪そうに) ちょっと調子に乗りすぎたかな…。

梨香子 ていうか、次は誰と付き合うことになるんですかね。

万里 え？

梨香子 千早さん。A班、つまりこの民宿で、あと残ってるのは、環希さんと、奈津だけなんですよね。

円佳 ちよいちよい、私まだ別れてないけど。

梨香子 可能性として。いや、私なんかたぶんそうなるような気がするんですよね。

万里 うーん、環希は考えにくいけどなあ。

梨香子 ですよ、となると。

万里と梨香子と円佳、包丁を無心に研いでいる奈津を見る。

万里 いやー、あれもないな。

梨香子 ですね。

奈津 ありますよ。ていうか、私の番はもう終わりました。

三人 ええっ？

万里と梨香子と円佳、驚いて奈津を取り囲む。

万里 まじで？ いつ？

奈津 春だったから、梨香子と円佳さんの間ですね。

円佳 なに、そんなの全然聞いてないんだけど。

梨香子 私も。

奈津 誰にも言ってませんでしたから。それにたった一晩の出来事ですから。

梨香子 なになに、何があったの？

奈津 詳しくは申せませんが、誤解のないように、私の番は終わったとだけ。

梨香子 何もったいぶってんの。白状しなさいよ。

奈津 少し落ち込んだ時期があって、あの人はそういうのに敏感ですから、みなさんも心当たりあるでしょ。それで、二人で部屋で話をするようになって、あとは流れで、

そこへ、千早がバケツを手に戻ってくる。

千早 お待たせ。…どうしたの？

円佳 いや、別に。それじゃあ。
万里 ま、楽しんできて。
千早 万里さんたちも来る。
万里 いやー、遠慮しときまーす。
千早 そう。じゃあ、いこっか。
円佳 うん。

千早と円佳、玄関から外に出ると手を繋いで立ち去る。

梨香子 何なんすか？ 何なんすか？ あれ。

万里 まあ、あと半日なんだから大目に見てやろうよ。

梨香子 ……万里さん。

万里 なに。

梨香子 今だから言わせてもらいますけど、私が一年生の時、万里さんに、バレンタインのチョコ渡そうとしたら受け取ってくれなかったじゃないですか。「私、そういうのじゃないから」って。

万里 ああ。

梨香子 なのに千早さんと付き合ってたって、どういうことなんですか？ 私そういうんじゃない、んじゃない、んじゃないんですか？

万里 いやー、私にも選ぶ権利あるから。

梨香子 ひどい。

万里 いやいや、冗談だって。あれは、あれだよ、だってそうだったんだから、自分のことがよくわかってなかったというか、ほんとに自覚がなかったというか。

梨香子 じゃあ、今なら私と付き合い合ってください？

万里 え？ いや、それは、

梨香子 冗談ですよ。なにマジになってるんですか。

織江 奈津。

いつの間にか庭に織江が立っている。織江は部活のTシャツを着ていない。

奈津 織江さん。

梨香子 織江さん。

万里 織江。どうしたの。元気にしてた？

織江 うん、まあね。

梨香子 環希さん、呼んできていいですか。

織江 いやいや、環希は呼ばないで。奈津に用事があったから来ただけだから。奈津、これ。

織江、魚の形をした玩具のようなもの(ルアー)を奈津に渡す。

奈津 えー、わざわざありがとうございます。次に港で会った時でよかったのに。何ですかそれ？

奈津 ルアー。織江さん手作りの。

梨香子 え、これ。織江さんが作ったんですか？

織江 ここ最近天気悪くて暇だったから。ほら、B班の家は元々漁師さんが住んでた家だったみたいで、いろいろ揃ってるんだよね。(奈津に)また感想きかせてくれる？

奈津 はい。

織江 あとこれ、ライン。二号で良かったんだよね。

奈津 あ、ほんと助かります。

織江 二号のラインはそれで最後だから。それより太いのはまだいっぱいあるんだけど。いいんですか。

織江 いいよ、いろいろ教えてくれたお礼。

奈津 ありがとうございます。大事に使います。

万里 いやー、意外だなあ。

織江 なにが。

万里 織江がそんなに釣りにはまるなんて。

織江 そうかな。

奈津 結構スジがいいんですよ。

奈津、バックヤードに砥石などを片付けに行く。

梨香子 あ、そうそう、織江さん、明日イモおじさんの命日ですよ。

織江 え？

梨香子 それでみんなでお墓参り行こうってことになったんですけど、よかったら織江さんも来ませんか。

織江 …ああ、うん、考えとくよ。それじゃ、また。

織江、帰りかけるが、立ち止まり、振り返って、

織江 あのさ、環希はさ、何か言ってたなかった、イモおじさんについて。

梨香子 え？ いえ。何の話ですか？

織江 いや、何でもない。気にしないで。

織江、立ち去る。

梨香子 織江さん、どうしたんですかね？ 私なんか余計なこと言いました？

万里 イモおじさん、倒れてるの見つけたの織江だからな。

梨香子 でももう一年も経ってるんですよ。

万里 まだ引きずってるのかな。

奈津、包丁を片手に戻って来る。

奈津 よし、じゃあ行きましょうか。

万里 え？ どこに？

奈津 鶏小屋に決まってるじゃないですか。まさか全部私一人にさせるつもりじゃないでしょうね。少しは手伝ってくださいよ。働かざる者食うべからず。

万里 包丁やめろ。怖いから。わかったから。

梨香子 えー、私も？

万里 私苦手なんだよな。あの羽むしるやつ。

梨香子 私、見てるだけでいい？

などと言いながら奈津と万里と梨香子、玄関から外へ出て立ち去る。
入れ違いに、環希が一階奥から姿を現す。

環希 …。

純奈が一階奥から野菜の入ったカゴを手にとって来る。

純奈 どうしたんですか？

環希 …今、織江の声が聞こえた気がしたんだけど。

純奈 そんな気になるなら会いに来たらどうですか？

環希 それはまだ遠慮しとく。織江も会いたがらないだろうし。あの子のことはあなたに任せることにする。

純奈 任せられても困るんですけど。私には織江さんが何を食べられて何を食べられないのかわかりませんし。最近気づいたんです。さりげなく混ぜてますよね、織江さんが食べられるものを。ルールみたいなものがあるのはわかるんですけど。いまいちそれが何かわからなくて。…何があったんですか？
…。

環希

純奈 環希さんと、何かあったから、織江さんはここを出て行ったんですよ。

環希 今は駄目。そのうち教えてあげる。

純奈 そのうちっていつですか？

環希 そうね。助けがきたら。それで、みんなの安全が確保されたら。

純奈 助けなんてほんとに来るんですか？

環希 …。

純奈 来ないんじゃないですか。ほんとに環希さんも信じてませんよね。一年ですよ、一年。あの千早さんが乗って来た船が最後で。あれが最後のチャンスだったんじゃないですか。

環希 後悔してる？

純奈 後悔はしてませんが。あんな人たちと一緒に死んでも嫌でしたし。

ただ、時々思うんです。私たちは、この島で朽ち果てていくのかなって。このままだどこにも行けずに。

環希 …。

そこへ浜辺の方から庭の中へ、若い女性と男性(葉月と貴士)がやって来る。貴士は何故か両手で顔の下半分を覆っている。

葉月 …すみません。

純奈 …え？

葉月 あのー、私たち、八丈島から来たんですけど。

純奈 八丈島から？

葉月 はい。

純奈 船で？

葉月 はい。

貴士 あの！

純奈 はい。

貴士 洗面所、お借りしてもいいですか？

純奈 え？

葉月 もう、後にしなさいよ。

貴士 でも。

環希 とりあえず、上がってください。洗面所はあっちです。あっちの突き当り。(美波を呼ぶ)美波。

美波 (声)はい。

環希 ちょっと来てくれる？

美波 何ですか？

美波、二階から降りて来る。玄関から入って来た貴士と鉢合わせになる。

美波
え？

貴士
あの、はじめまして。

貴士と美波、見つめ合う。

純奈
シェイクスピアの『あらし』で外から来た大勢の人間を初めて見たミランダは何
て言うんですたっけ？

環希
「人間というものは、まあ、何という美しいものじゃ！」だったかな。

暗転。

第四幕

約一時間後。

民宿のロビー。葉月と貴士が並んでソファに座っている。足元に手荷物。

葉月
あんた、わかってるでしょうね。

貴士
わかってるよ。

葉月
さっきの、良くなかったよ。

貴士
なに。

葉月
ここに着くなり、洗面所かしてくださいって。

貴士
でも。

葉月
ヒゲぐらいなに。

貴士
お姉ちゃんにはわからないよ。

葉月
まだどんな人たちかわからないんだから。

貴士
：いい人たちそうだけど。

葉月
あんたね、それで何回失敗してきたと思ってるの。どれだけ私の人生の足をひ
っぱれば気がすむわけ。

貴士
その言い方やめてほしい。

葉月
事実でしょうが。

貴士
：おじさん、元氣だといいな。

葉月
あんた覚えてるの？

貴士 覚えてるよ。
葉月 嘘ばかり。
貴士 ほんとだって。

美波、二階から降りてくる。

美波 あの、お待たせしました。準備できましたので、いったんお荷物をお部屋に。
葉月 ありがとうございます。行くよ。
貴士 う、うん。

美波、葉月、貴士、二階へ立ち去る。

カウンターの奥から綾乃と千早と梨香子と万里と円佳と純奈、わらわらと登場。

綾乃 見ましたか!?
千早 見たよ! 見た見た!
綾乃 あれ、男ですよね。
千早 だよね。
綾乃 ちょっとさ、新田真剣佑に似てませんか?
千早 いやいや、吉沢亮でしょ。
梨香子 千早さん、ああいうのがいいんですか?
千早 うーん、久しぶりすぎてちょっとよくわかんないんだけど。
綾乃 わかります。
万里 どんな人なの。
純奈 私も、少ししか話していませんので。石鹸かしてほしいって。
万里 石鹸?
純奈 ヒゲを剃りたいからって。
円佳 ヒゲ? 何で?
梨香子 美意識が高いんじゃないですか。
綾乃 ああ、もう、やっちゃったー。
梨香子 どうしたの?
綾乃 私、最近、腕の毛処理してません。
万里 そんな話はいいよ。
千早 後で剃ってあげるから。
綾乃 お願いします。

そこへ、奈津が織江を連れて浜辺の方から庭に入って来る。

純奈 あ、織江さん。
織江 外から人が来たんだって。
綾乃 ええ、そうなんです。今二階にいます。

織江と奈津、玄関からロビーの中へ。

奈津 ていうか、島の外にまだ生きてる人がいたんですね。
純奈 八丈島から来たそうです。二人で。
織江 二人？
純奈 はい。
奈津 助けに来てくれたんですかね？

そこへ、一階の奥から環希が姿を現す。

環希 みんな揃ってるみたいね。(織江に気付いて)織江、久しぶりじゃない。
織江 うん。
環希 元気にしてた？
織江 船が来たってきいて。
環希 そうなの。まだ詳しいことはわからいんだけど。ちょっと痩せたんじゃない？
ちゃんとお食べてるの？

そこへ、美波に案内されて葉月と貴士が二階から戻って来る。

美波 環希さん。どうしましょう？
環希 そこに座ってもらって。
美波 こちらにどうぞ。

葉月と貴士、席に着く。他のメンバーも席に着く。

環希 まずは自己紹介からはじめましょうか。私は藤村環希といます。
他のメンバーも、順番に自己紹介。

環希 ここにいる、千早さん以外は、元々、埼玉の高校の演劇部のメンバーで、この蓬菜島に旅行に来てたんですけど。あの日以来、外と連絡が取れなくなってます。

て、それで、よろしければ、外がどうなってるのか教えて頂きたいんです。

葉月 …あの、それは別にかまわないんですけど、この島の責任者の方は？ 責任者というか代表の方。

環希 それはまあ、私ということになるのかな。

葉月 いや、失礼しました。えーっとですね、要するにもっと大人の方は？ ということなんですけど。

環希 申し訳ないんですけど、それがいいんです。
葉月 いない？

環希 私たちしかないんです。この島には。
葉月 え？

環希 これで全員なんです。私たちがここに来たときは他に二家族はいたんですけど、みなさん、あの日の直後に船で助けを呼びに出られたままで。

葉月 いやいや、そんなはず不是吗。佐々木修一郎さんって方ご存じないですか？ここに来る前に家に寄って来たんですけど、留守だったみたいで。ほら、あのイモ畑のある。

環希 失礼ですけど、佐々木さんとは、どのような関係で？

葉月 おじです。私たちの父の兄で。それで私たちこの島に来たんですけど。

綾乃 ああ、イモおじさんのことか。

隣に座っていた純奈、綾乃の太ももを叩く。

葉月 イモおじさん？

綾乃 いえ、何でもありません。

環希 あの、どうか、落ち着いて聞いて頂きたいんですけど、はい。

環希 亡くなられたんです。ちょうど一年前に、その浜辺で倒れるところみつめてもともと心臓がよくないとはおきしてたんですけど。勝手ながら埋葬は私たちがさせて頂きました。そのままにしておくわけにはいかなかったのです。後で、もしよろしければ、ご案内します。お墓。

葉月 …。

環希 すみません。驚かれましたよね。

葉月 いえ、大丈夫です。おじといってもほとんど会ったことなかったのです。佐々木葉月といえます。

貴士 佐々木貴士です。

葉月 何から話せばいいのかちょっとわからないんですけど、私たちは、八丈島からきたんです。八丈島っていうのはここから北に六十キロくらい行ったところにある島

なんですけど。

美波、カウンターのの中から伊豆諸島の地図を出してくる。

葉月 私たちは島の南側にある町で暮らしてたんです。両親はちょうど東京に出かけてて、審判の日に。それで、弟と二人だけになってしまっただけ。

環希 審判の日？

葉月 ああ、八丈島ではそう呼んでるんです。あの日のことを。それで、ご存じなんですか？ あの日、何が起きたのか。

環希 ええ、私たちも少しは。それで、日本はどうなったんですか？

葉月 私たちにも正確なことはわからないんですけど、主要な都市は壊滅したとかで、それは日本だけでなく世界中の。

純奈 埼玉も、ですか？

葉月 ええ、関東圏は全滅に近いって。

間。

葉月 私もこの目で見たわけじゃありませんけど。というのは、審判の日から間もなく八丈島から出られなくなってしまったので。

環希 八丈島には何人くらい？

葉月 今はそうですね、三千人くらいはいると思います。

万里 そんなに？

葉月 八丈島より北の、大島にはもっとたくさんの方が生き残ってるって聞いてます。大きな市場や病院なんかもあるって。私たちが最初はそのちに行こうと思ったんですけど、北側の航路は警戒が厳しくて。

環希 それはどういう？

葉月 今、八丈島は鎖国というか、人が自由に出入りできない状況になっていて。ある宗教団体が島を仕切るようになってから。船なんかもみんな没収されて。それで、だんだん居心地が悪くなってきたので、弟と島を出ることにしたんです。もしよろしければ、しばらくここに置いてもらえると助かるんですけど。

環希 ええ、それはかまいませんよ。というか、佐々木さんのお家が今ちょうど空いてますし。ただ少し片づけた方がいいと思いますので、しばらくはここに泊まってください。(他のメンバーに)それで、いいよね。

他のメンバー、だいたい肯定的なリアクション。

美波 あのだ。お二人は、ずっとここに、住むご予定ですか？
葉月 え？

美波 この島に。どうなんですか？

葉月 いや、それはわかりませんけど。来たばかりですから。

万理 美波、どうしたの？

美波 もしもなんですけど、お二人がここに住むんでしたら、船を、船をお借りできませんか？

環希 美波。

美波 すみません。でもこれはチャンスじゃないですか。みんなでこの島を出る。ね、そうですよ。

暗転。

暗闇の中で、綾乃と純奈の台詞合わせの声が聞こえる。暗さにだんだん目が慣れてくると二人が停電をいいことに変なボーリング合戦を繰り広げていることがわかる。

綾乃 「イザベラ、兄貴は助けられないぞ。彼の罪は、法律上、どうしても死刑に相当している。」

純奈 「アンジェロ様、いつご執行になりますのです？ 長かれ、短かれ、それまでの間に、最後の心得違いのないように、覚悟をいたさせようございます」

綾乃 「けれども、かりに、無益な例え話として言えばだ、…彼の妹たるお前に、さる仁が想いを懸けたとする。その仁は裁判官に厚い信用とか、又は自身の地位が高いとかいう関係上の、国家の土台石たる法律の束縛からでも、お前の兄貴を救い出すことの出来る仁だ。そうしてその仁に頼るより他には、救う道がないとする。ただし、それが為には、その仁に、お前が大切な肉体を任せてしまわねばならない、お前は どうする？」

純奈 「たとえ兄の為にだって、自身で忍びえないことは出来ません」

綾乃 「じゃ、お前の兄貴は死なねばならん」

純奈 「その方がようございます。一思いに死んだ方がましです。兄を助けようために妹が永劫に死にますよりは」

綾乃 「…わしはお前を恋しているのだ」

純奈 「兄はジュリエットと恋をしましたので、それで閣下は、兄を死刑にするとおっしゃるではございませんか」

綾乃 「イザベラ、お前が言うことをききさえすれば、死刑にはしない」

純奈 「あなたは徳の高いお方ですから、そんなことをおっしゃって、人をお試し遊ばしても、お名の汚れにも何にもなりません」
綾乃 「いいや、信じてくれ、わしの名誉にかけて」

民宿の一階ロビーの明かりが点く。

ソファには貴士、その近くのテーブル席には葉月、カウンターの中には美波。

別のテーブル席では綾乃と純奈が衣装を作っている。テーブルの上には裁縫道具や化粧ポーチなど。

夏の夜。虫の鳴き声。

美波 あ。

貴士 電気、点きましたね。

綾乃 それじゃあ、衣装の続きしよ。

純奈 いいけど、もう遅いよ。

綾乃 今日はここに泊まるんだからいいじゃない。

純奈 縫うのは私なんだからね。疲れてきた。

綾乃 肩でもお揉みしましょうか。

純奈 いいから、もうやるから。何もしないで。

純奈、衣装の制作を再開する。

万里と梨香子、外から戻って来る。手には懐中電灯や工具箱など。

万里 あーもう、せっかくお風呂入ったのに汗だく。

梨香子 私ですよ。

綾乃 お疲れ様です。さすが照明チーフ。

万里 だから照明は電気屋じゃないっの。

美波 どうでした？

万里 前にも言ったけど、イモおじさんの家の発電機と部品を交換するとか何かしないと、根本的な解決にはならないよ。

美波 そうですか。

万里 いやー、もうちょっといろいろ限界かも知れない。

梨香子 円佳、どうなったか知らない？

美波 え？

梨香子 ほら、千早さんと。

美波 ああ。

梨香子 まだ部屋に二人でいるのかな。

万里 見に行ってみる？
梨香子 行きましょう。

万里と梨香子、二階へ立ち去る。

貴士 みなさんは凄いですね。

美波 え？

貴士 たった十人で。あれからずっと。

美波 ああ。

綾乃 いやー、大変だったんですよ。いろいろあったんですから。でも、みんなで協力し合って乗り越えてきたんです。畑を耕して芋作ったりしてね。

貴士 みなさん、仲いいんですね。

純奈 まあそれなりにね。元からチームでしたから。

美波 おじさんにも、いろいろお世話になりました。島でどうやったら生きていけるのか、私たちに教えてくださったんです。

葉月 思い出した！

美波 はい？

葉月 美波さんはこの民宿やってた人の孫なんだよね。

美波 はい。

葉月 私、美波さんと会ったことあるわ。一度だけ家族でこの島に来たことあるのよ。
(貴士に)あんたは小さかったから覚えてないだろうけど。その時、この民宿に小さい女の子がいたのよね。

美波 お客さんじゃないですか？

葉月 孫だって言ってたから間違いないよ。お祖父さんとお婆さんは？

美波 お祖父ちゃんは、ずいぶん前に亡くなって、お婆ちゃんは埼玉で、うちの両親と。…そっか。

美波 だから、この民宿も閉める予定だったんですよ。みんなが最後のお客さんのはずだったんですけど。…すみません。昼間は急にあんな話して。

葉月 え？

美波 私のせいなんですよ。みんながここに閉じ込められてしまったのは。だから何とかしたくて。

純奈 またその話してる、みんな気にしていないから。でも。

美波

葉月 美波さん、気持ちはわかるけど、その件についてはもう少し考えさせてくださいね？ あの船は私たちにとっても大切なものだから。

美波 はい。そうですよね。

葉月　でも、これは気休めかも知れないけど、本土にも、少しは生き残ってる人がいる
つてきいたことがある。

美波　え？

葉月　みなさんに期待を持たせるようなこと言うのは無責任かもしれないですけど、貴士、
私先に部屋行ってるね。

貴士　うん。

葉月　おやすみなさい。

みんな　おやすみなさい。

葉月、二階へ立ち去る。

貴士　：まずは大島に行くのがいいと思いますよ。ただ、八丈島を大きく迂回しないと
いけないので。相当たくさん燃料を積んでいかないと。

美波　燃料ならあるんです。あつたよね？

綾乃　たぶん港にまだ残ってると思うけど。

純奈　できた！

綾乃、仕上がった衣装を持ち上げて姿見の前へ。

純奈　どう？

綾乃　おー、いいんじゃない？

貴士　それは？

綾乃　ほんとは明日ちよつとしたレクリエーションを予定してたんですけど、延期にな
るかもしれないね。

純奈　延期でしょ。それどころじゃないでしょ。

綾乃　ですから、せっかくなので衣装の手直しを。私たちは演劇部ですから。

純奈　元演劇部でしょ。

綾乃　でも私たち二年はまだ引退してないけど。

純奈　引退って、卒業もしてないんだから。

綾乃　ということは、私たちはまだJKなのか。

純奈　うーん、どうなんだろうね。

綾乃　つまり、私たちは永遠の女子高校生。

純奈　それじゃあ、織江さんや環希さんたちはどうなるの？　高校は卒業したけど、大

学入学はまだでしょ。

綾乃　永遠に何でもない人？　無職。

純奈　失礼なこといってるよ。

貴士、イザベラの衣装に興味津々な様子。

純奈 空き家のカーテンを切って作ったんですよ。
すごい。可愛いですね。

綾乃 『尺には尺を』のヒロイン、イザベラっていう役の衣装です。

貴士 僕、みなさんがお芝居していると見てみたいです。

綾乃 そうだ。お二人の歓迎公演ということにすればいいんですよ。

純奈 ああ、その手があったか。

綾乃 ただ、あれなんですよね、共演者としてはイザベラ役に納得いってなくって。

純奈 おいおい、それ本人を前に言うか？

綾乃 芸術とは残酷なものなんですよ。

円佳、二階から降りてくる。放心した様子で。

円佳 (独り言) 深入りするつもりはなかったけどさ……。でもな……。わかってたんだけどな。

美波 ……円佳さん？ どうかしたんですか？

円佳 え？ ああ、何でもなし。そつとしといて。ちよつと外の空気吸ってくる。

円佳、玄関から外へ、浜辺の方へ立ち去る。

万里と梨香子が二階から降りてくる。

万里 円佳、知らない？

美波 今、外に。

万里 そっか。大丈夫かな。

梨香子 やっぱ駄目だったみたい。千早さんと、別れることになったって。

綾乃 千早さん、容赦ねーな。

万里 私ちよつと様子見て来るわ。

梨香子 私も行きます。

ロビーの明かりが消える。

万里 え？

美波 停電ですね。

万里 またー？

場面転換。

数時間後。明かりの消えた民宿の一階ロビー。月明り。
ソファで千早が寝ている。

貴士が、そろそろと二階から降りてくる。千早には気づかない。ロビーに飾ってあるイザベラの衣装を手に取ると、姿見の前に移動して、体にあててみる。楽しそう。次に衣装を置いて、ウィッグを手にとると、姿見の前に移動して、

千早 …何してるの？

貴士 え、いや、これは、その。

環希 (二階から声)今日はここに泊まっていったら？ 純奈や綾乃もこっちにいるんだし。

貴士、驚く。

千早 こっちこっち、

貴士 え？

千早はイザベラの衣装を手にとると、貴士を一階奥へ連れて行く。
二階から、織江と環希が話しながらやって来る。

織江 帰る。

環希 もう遅いし危ないと思うけど。

織江 へー、心配してくれてるんだ。

環希 夜、外では一人にならないって決まりでしょ。

織江 よく言うよ。あのさ、そんなに私のことが信頼できない？

環希 それは織江の方でしょ。

織江 今の環希の何を信頼すればいいわけ？

環希 全部。

織江 じゃあさ、私がプレゼントしたイヤリング、あれ返してよ。

環希 何で。

織江 次来た時でいいから。私が何も知らないと思ってる？

環希 何の話？

織江 あの貴士って子、似てるよね。

環希 …。

織江

血が繋がってるんだからあたり前か。あいつ私にも言い寄ってきたの。これだけみんなを助けてるんだから見返りがほしいって。拒否したら、何て言ったと思う？ 「環希ちゃんはしてくれたのになって」

環希

…それで？

織江

もちろん断ったよ。私はね。

環希

そう。

織江

それでも時々、息ができなくなる。あの時の事を思い出すと。環希は大丈夫なの？

環希

…私は平気。

織江

ほんとに？

環希

大した問題じゃないから、私にとっては。

織江

じゃあ何で黙ってたの？

環希

他の人にとってはそうじゃないでしょ。

織江

私には言っただけだった。

環希

織江はわかりやすく態度に出るしね。それに、誰かを特別扱いとかしたくないから。

織江

そうやっていつも一人で。

環希

だから、私にとっては大した問題じゃないって言ってるでしょ。…こんなところでする話でもないしね。おやすみ。気をつけて帰ってね。

環希、二階へ立ち去る。

織江

…なに、見送ってくれるんじゃないの。

織江、玄関から外へ。

そこへ、カウンター奥から純奈が姿を現す。

純奈

あの、織江さん、今の話、ほんとなんですか？

織江

…何も聞かなかった。そういうことにしといて。いい？

織江、立ち去る。

純奈

…。

純奈、何かを考えながら玄関から外へ立ち去る。

千早と貴士、一階奥から戻って来る。貴士はイザベラの衣装を着ている。

千早 今の話聞いてた？
貴士 え？ いえ。
千早 そっか。

貴士、姿見に映った自分を見る。

貴士 それどころじゃないですよ。
千早 それはそれでよかったかもしれない。
貴士 それよりも、早く、これ脱がせてください。
千早 うーん、でもせっかくだから、

千早、姿見の前に椅子を置く。

千早 ここ座って。
貴士 え？ いや。
千早 いいから。

貴士、しぶしぶ椅子に座る。千早、ウィッグを手取る。

貴士 何ですか、やめてください。
千早 いいから、じっとしてて。絶対似合うから。

千早、ウィッグを貴士にかぶせる。ブラシで髪をとかず。

千早 どう？
貴士 恥ずかしいです。
千早 きれいだと思う。
貴士 そうでしょうか。
千早 ねえ、メイクしていい？
貴士 え？
千早 やったことある？
貴士 …あります。
千早 やっぱりね。
貴士 でもうまくできなくて。
千早 任せて、私プロだから。

千早、貴士のメイクをする。
音楽。

千早 どう？
貴士 ……

そこへ、葉月が二階からやって来る。

葉月 ……ちょっと、貴士、何してるの？ ……これは違うんです。

千早 何が違うんですか？

葉月 あんたも何か言いなさいよ。

千早 いいんですよ。そんなの。嘘つかなくても。ねえ。

葉月 ……だから言ったじゃん、あんたさ、早くない？ 早すぎない？ 本性見抜かれるのが。

貴士 ……ごめん。

葉月 またか。もう、いつもこうだよ。何回、私の人生の足引っ張れば気が済むわけ。

千早 大丈夫ですよ。

葉月 何が大丈夫なんですか？

千早 たぶん、ここみんななら。

そこへ二階から、綾乃、登場。『尺には尺を』の台詞をブツブツ言いながら。

綾乃 「じゃ、お前の兄貴は死なねばならん」「わしはお前を恋しているのだ」「イザベラ、お前が言うことをききさえすれば、死刑にはしない」純奈、見かけませんでした？

千早 え？ いえ。

綾乃 そうですか。「いいや、信じてくれ、わしの名誉にかけて」「誰がそれを本当だと思うものか。かつて汚されないわしの名前、厳格なわしの生活」

などと言いながら綾乃、貴士の様子には触れず、一階奥へ立ち去る。

葉月 ……

綾乃、走って戻って来て。

綾乃 素晴らしい！ 素晴らしいです。見つかりましたよ。私にふさわしい共演者が。

場面転換。

第五幕

民宿のロビー。夜。カラオケ大会用の小さなステージには簡素な舞台美術が組まれている。ステージ前面のひきわり幕は閉じている。テーブル席が客席のように組み替えられている。

綾乃、アンジェロの衣装を着て舞台の前に。客席には葉月、織江、美波、梨香子、少し離れてカウンターの付近に純奈。織江は部活のTシャツを着ている。

万里、照明に使う投光器の準備をしている。奈津、ピアノの伴奏の準備をしている。万里と奈津の手元には手書きの台本らしきもの。

綾乃 えー、本日はご来場、誠にありがとうございます。まもなく佐々木様ご一行歓迎公演『尺には尺を 一部抜粋』の開演となります。それでは最後までごゆっくりお楽しみください(拍手を求めると、いきいたいところなのですが、準備が少々おしておりまして、

綾乃、ひきわり幕の中を覗く。

綾乃 まだですか？

(中から声)まだ。もう少し。

綾乃 えー、そういうわけなので、もうしばらくお待ちください。

万里 あのさ、一応、きっかけの確認をしたいんだけど、

奈津 あ、私も。

綾乃 そこに書いてますから。

万里 読んでもわからないからきいてるの。

綾乃 もう、じゃあこっちへ。

万里 ほんとぶつつけだなあ。

綾乃と万里と奈津、一階の奥へ立ち去る。

織江 …それで、さっきの話の続き、いいですか。
葉月 はい。

織江 一番厳しいのはやっぱり食料ですね。去年はなんだかんだ備蓄の食料が残ってましたから、おじさんや、他の人が残してくれてた。今年はそれがもうほとんど残ってないんです。

葉月 でも、畑でイモを作ったりしてるんですよ。

織江 ここにいる人間を養うにはそれだけじゃ足りないんです。それに二人も増えまして。だよね。

美波 はい。このまま冬になるとかなり厳しいことになると思います。

梨香子 え？ そうなの？

美波 今年の冬だって、ご飯の少ない日あったでしょ。あれがもっと増える感じになると思う。

梨香子 それってヤバくない。ていうか、私たちそんなのきいてないんだけど。

美波 それは、

織江 環希がみんなを不安にさせないように。私も美波からきくまで知らなかった。それでですね、葉月さんたちにはやっぱり、私たちと一緒にこの島を出ることを考えてみてほしいんです。

葉月 私たちの船で。

織江 そうですね。

葉月 でもまだ着いたばかりなので。

織江 はい。もう少し落ち着いてからでいいと思います。ただ準備のことも考えると、早いに越したことはないので、

そこへ、二階から環希と円佳がやって来る。織江の不穏な行動を察知して円佳が呼びに行っていたらしい。

環希 織江、何してるの？

織江 何って、葉月さんと話してるだけだけど。

環希 いいから、ちょっとこっち来て。

環希、織江を一階奥へ連れて行くこうとする。

織江 何で。

環希 話なら私が聞くから。

織江 私は葉月さんと話しているの。

環希 勝手なことしないで。

織江 なに、私が葉月さんと話すのに、環希の許可がいるの？

葉月 …環希さん、ほんとなんですか？ 今年の冬が厳しいって。その、食料の。

環希 美波。

美波 すみません。

織江 美波には私が頼んだだけだから。こんな大事なことを隠してること自体問題でしょ。厳しいことは厳しいですけど、何とかなると思います。準備はしてますから。みんな。美波、そうだよ。

美波 …はい。

梨香子 どっちなの？

美波 だからギリギリなの。ギリギリ何とかなるかもしれないし、何とかならないかもしれない。

織江 ここにいたらギリ貧なのは間違いないでしょ。発電機だっていつ壊れるかわからないし、服だって今ある分しかないし、畑仕事や釣りに使ってる道具もいつかは駄目になるし。この島で、ずっと生きていくことなんて不可能でしょ。

環希 あのさ、いい加減にしてくれる。どういう風の吹きまわし？ 昨日まではここに寄り付きもしなかったのに。織江はさ、何がしたいの。何のつもりなの。

織江 …。

純奈 環希さん、何でわからないんですか？ 織江さんは、何ていうか、楽にしたいんですよ。環希さんを。責任から。

環希 なにそれ。

純奈 この島にいる限り、環希さんは楽になれないんじゃないかって。そうですね。だからみんなで島を出ようって、

環希 私はそんなこと頼んだ覚えはないけど。私のためを思うなら何もしないで。織江がこんなことしたら、みんなが不安になるでしょ。それくらいわかるでしょ。

織江 少しくらい不安になった方がいいと思う。みんなで少しづつ。誰かが一人で抱え込むより。

環希 それが余計なお世話だっていつてるの。

美波 あの、いいですか？ お二人の間に何があったんですか？ 織江さんが、私に相談してきた時に、何か変だなって思ったんです。変といえばずっと変なんですけど。この一年間、ずっとお二人はお互いを避けてましたよね。それが織江さんが急に私に話をしたって。私だって、口止めされたので食料の話は話したくなかったんですけど。織江さんが、やっぱり、何かちょっと変だったの。

環希 ほら、美波が不安になってるじゃない。

美波 いえ、そういうことじゃないです。もしよろしければ話してほしいんです。二人が何故こうなってしまったのか。みんなも、ずっとモヤモヤしてると思うので。私もききたいです。

梨香子

円佳 いや、それはさ、二人の問題じゃない？ それはいろいろあるでしょ、織江だって、環希だって。ねえ。

純奈 …もう全部話したらどうですか？ 何も知らないみんなも可哀想だと思っ
よね。二人だけの秘密にされても困るっていうか。私も、みんなもふりまわされ
て迷惑ですし。

梨香子 純奈、何か知ってるの？

純奈 きいちゃったんですよ、昨日の夜。ここで、お二人の話。それで私、織江さんの
気持ちやっとわかりました。私だって、そんなことした人の作ったものなんて食
べたくないですから。

梨香子 私たちにもわかるように説明してくれる？

純奈 イモおじさんで、優しかったじゃないですか。私たちにいろいろ教えてくれて
でも、そうじゃなかったんですよ。私たちの知らないところで見返りを求めてた
んですよ。

織江 純奈。

純奈 私たちは人質だったんです。何も知らない。

梨香子 人質って、

純奈 私は自分に腹が立って仕方ないんですよ。何も知らなかった自分に。ほら、環希
さんはこんな時でもポーカーフェイスで、何も無い顔してますけど、ほんとの
ところはなんですか？ どういう感情で動いてるんですか？

綾乃、万里、奈津、戻って来る。上演の打ち合わせが済んだようだ。

綾乃 あのー、お取込み中すみませんが。そろそろはじめてもいいですか？
環希 …いいよ。みんなもう揃ってるから。

環希、席に着く。他のメンバーもひとまず席に着く。

万里、投光器を準備。奈津、ピアノの準備。

千早 待って待って。

千早、ひきわり幕の中から出てきて葉月の隣に座る。

千早 葉月さん、びっくりしないでくださいね。

葉月 え？ ああ、はい。

綾乃 えー、今から上演します演目は、シェイクスピア『尺には尺を』の一部抜粋であ
ります。あらすじはと申しますと、舞台となりますのはウィーン。

綾乃が合図を出すと奈津がロビーの明かりを消す。万里が投光器の明かりを点け

て綾乃を照らす。

綾乃
そのウィーンを統治する侯爵ヴィンセンショーは、とある理由で旅に出ます。その間、侯爵代理を任されたのが、私が演じます若き貴族、アンジェロ。アンジェロは法律に厳しい真面目過ぎる男で、それまで緩かった性道徳について厳しく取り締まりはじめます。その見せしめになってしまったのが、イザベラの兄、クロードイオ。クロードイオは婚前交渉で恋人のジュリエットを妊娠させてしまいました。ウィーンの法律では婚前交渉は死刑。そこで妹の、修道女見習いのイザベラは、監獄に繋がれた兄の助命を嘆願するため、アンジェロに面会します。すると、アンジェロはイザベラに一目ぼれしてしまうんですね。さて、どうなることやら、第一幕のはじまりはじまりー。

綾乃、拍手を求める。千早、拍手。他の面々もとりあえず拍手。

綾乃、ひきわり幕を開く。そこにはイザベラに扮した貴士。カラオケ用のマイクを手にしている。綾乃も舞台上上がり、マイクを手にする。以降の劇中劇はマイクを使用して上演される。

奈津はピアノで伴奏をはじめめる。

綾乃
「イザベラ、兄貴は助けられないぞ。彼の罪は、法律上、どうしても死刑に相当している。」

貴士
「アンジェロ様、いつご執行になりますのです？ 長かれ、短かれ、それまでの間に、最後の心得違いのないように、覚悟をいたさせようございます」

綾乃
「けれども、かりに、無益な例え話として言えばだ、…彼の妹たるお前に、さる仁が想いを懸けたとする。その仁は裁判官に厚い信用とか、又は自身の地位が高いとかいう関係上の、国家の土台石たる法律の束縛からでも、お前の兄貴を救い出すことの出来る仁だ。そうしてその仁に頼るより他には、救う道がないとする。ただし、それが為には、その仁に、お前が大切な肉体を任せてしまわねばならない、お前は どうする？」

貴士
「たとえ兄の為にだって、自身で忍びえないことは出来ません」

綾乃
「じゃ、お前の兄貴は死なねばならん」

貴士
「その方がようございます。一思いに死んだ方がましです。兄を助けようために妹が永劫に死にますよりは」

綾乃
「…わしはお前を恋しているのだ」

貴士
「兄はジュリエットと恋をしましたので、それで閣下は、兄を死刑にするとおっしゃるではございませんか」

綾乃
「イザベラ、お前が言うことをききさえすれば、死刑にはしない」

貴士 「あなたは徳の高いお方ですから、そんなことをおっしゃって、人をお試し遊ば

しても、お名の汚れにも何にもなりません」

綾乃 「いいや、信じてくれ、わしの名誉にかけて」

貴士 「そんな要求をする人に何の名誉があるろう。何が信ぜられよう」

貴士、舞台を降りてソファの付近へ。

貴士 「私はこの通りを世間に言いふらします。待っておいでなさい。さ、兄をすぐに

許すという指令書をお書きなさい。そうでなくば、私は、大きな声をして、このことを世間へ吹聴します」

綾乃 「誰がそれを本当だと思うものか」

綾乃も舞台から降りてソファの付近へ。

綾乃 「かつて汚されないわしの名前、厳格なわしの生活、侯爵の名代たるわしの職権」

綾乃、貴士の手からマイクを奪い取る。以降、マイク二刀流で。

綾乃 「こう一旦乗りかけた以上は、もうこの心の駒の手綱は緩めない。このするどい
48

欲望に対して、うんと言いな。内々は望んでいながら、何もああのうこうのと体裁ぶって、うぢうぢと、はにかんでいるには及ばん。わしの言う通りに身を任すか、否といえ、兄の命がないばかりでなく、そのつれなさへの面当てに、わざと長い間苦しませてから殺すことにする。明日までに返事をしな。返事をしないと、今の感じのまま兄へ酷くあたるぞ。そっちはそっちで、勝手に何なりと言いつ触らすがいい。本当のことを言ったって、嘘で覆してみせる」

綾乃、貴士から奪ったマイクを差し出す。貴士、マイクを震える手で受け取る。

綾乃、退場。

貴士 「ああ、誰に訴えたらいいだろう？ この通りに話したって、誰も本当にしないに相違ない」

織江、環希のそばに行く。二人、見つめ合う。

貴士 「おお、恐ろしい口。同じ一枚の舌で人を生かしてもすれば殺しもある。兄さんのところへ行こう。一旦の情欲の為に心得違いをなさったけれど、気位が高くなって、

恥を知っている兄さん。妹をそんな汚らわしい目に遭わせるよりか命を捨てるとお言いに違いない。さあ、イザベラ、お前は是非とも貞節を守って、お兄さんを見殺しにおし。貞操ということの方が同胞よりも大切です」

貴士、カラオケ用の舞台上に戻る。

貴士 「おお、神様、男は勝手に女を利用して、あなた方の御製作を損ないまする。」

奈津のピアノの伴奏、終わる。綾乃、ひきわり幕を閉じる。

綾乃 これにて第一幕終了です。はたしてイザベラの運命やいかに。

綾乃、拍手を求める。奈津、ロビーの明かりを点ける。

綾乃 続いて第二幕の準備をしますので。しばしお待ちを。私がクローディオ役も兼ねているので衣装を着替えないといけないのです。

綾乃、着替えのために一階奥へ立ち去る。

ロビーは変な空気になっている。

万里 ……どうしたの？

円佳 えーっと、いやー、ごめんごめん、純奈が、はじまる前に変なこと言うから。ねえ。

梨香子 ええ、人質とか。

万里 人質？ 何の話？

織江 ……環希。

環希、拍手する。

環希 いいお芝居だったじゃない。私がクローディアスで、織江がガートルードってことでもいいのかな。(純奈に)これは偶然？

純奈 偶然です。でもどうなるかはわかってました。

環希 それで。どうなったの？

純奈 それは、みんなにきいてみればいいんじゃないですか。

間。

環希 そっか。そうだよね。それじゃ、これからのこと、考えないかね。

純奈 これからのこと？

環希 もう冬までに時間が無いから。この島を出るとして、何が必要か精査しないといけないし。もちろん、葉月さんたちが協力してくれることが大前提だけど。

純奈 それって。

環希 織江と美波の提案、前向きに考えてみるってこと。

織江 何で。

環希 私を解放してくれるんじゃないの。

織江 そうだけど。

環希 これで自分のしたことと、やっと向き合える気がする、とても言っておけば納得してくれる？

織江 …。

綾乃、クロードイオの衣装に着替えて戻って来る。

綾乃 えー、第二幕の準備が整いましたので上演を再開したいと思います。

環希、立ち上がって二階の自室に向かう。

綾乃 あの環希さん、今からはじまりますけど。

環希 申し訳ないけど、私はここまでにしとく。今日はちょっと巡り合わせが悪かったと思う。ごめんね。

環希、二階へ立ち去る。次の綾乃の台詞の間に客席から、純奈、織江、美波、円佳、葉月、梨香子、次々と立ち去る。

綾乃 えーっと、それでは改めまして、第二幕のあらすじなんですけど、第二幕は、イザベラが兄クロードイオの捕らえられている監獄を訪ねます。そこでイザベラはクロードイオに侯爵代理アンジェロとの取引を断ったこと伝えます。するとクロードイオは自分の命を助けるために、妹にアンジェロと寝るよう説得をはじめます。でもまあ、もしも命がかかってたら人間そんなものかもしれないですね。それではいよいよ第二幕、をはじめたいところなのですが。

客席には千早、万里、奈津の三人。

綾乃 …あれ、みんなどこに行ったんでしょ？

場面転換。

数か月後。秋。

夜。民宿のロビー。

テーブルで千早が貴士の指に包帯を巻いている。貴士は指を怪我したようだ。テーブルの上には救急箱。

千早 …できた。

貴士 ありがとうございます。

千早 どうしてそうなったの？

貴士 船の整備をして。ちょっと、ぼーっとしてたんです。

千早 骨には異状ないと思うけど。

貴士 はい。でも明日からどうしようかな。片手でもできないことはないんですけど。

お姉ちゃんに頼もうかな。

千早 葉月さんもできるの？

貴士 ほんとは私よりも船に詳しいんですよ。面倒だから私にやらせてるだけで。

千早 そうなんだ。

千早、救急箱をカウンターの中に片付ける。

貴士 で、そっちの準備はどうなってるんですか？ 食料とか。

千早 うん、もうほとんど終わってたって、美波が。

貴士 え？

千早 後は積み込みだけじゃないかな。

貴士 ちょっと早すぎませんか。予定では出発まであと一カ月くらいありますよね。

千早 みんな張り切ってるからね。

貴士 …何か、すごく責任感じますね。

千早 どうして？

貴士 あの劇の後、こうなったわけでしょ。どんどん話が進んで。

千早 うん、ほんとありがとね。お姉さん、説得してくれて。

貴士 私もこの人たちの力になりたいと思っていたので。お姉ちゃんもいろいろ思うところあったみたいですし。おじさんのこととか。

貴士、ソファに座る。

千早 それは気にしなくていいんじゃない。
貴士 でも身内がしたことですから。私もショックでしたし。…環希さんは、今何を考
えてるんですかね？

千早 何で私にきくの。

貴士 千早さんなら何か知ってるかなって。

千早 私、環希さんから嫌われてるから。

貴士 そうなんですか？

千早 嫌われてるは言い過ぎか、距離をとられてるっていうか。

貴士 それは私に対してもそうですよ。

千早 それがまた違うのよね、私の場合は。…あの後、しばらく、みんなどう接してい
いのかわからないって空気はあったけど、ちゃんとして準備は進んだわけで。

千早、貴士の隣に座る。

千早 たぶん環希さんも前々から考えてたんだと思う。島を出るっていう選択肢も。船
が無かっただけで。

貴士

千早 だから、貴士君たちが責任とか感じる必要はなんにもないの。

千早と貴士、見つめ合う。二人の顔が近づく。

そこへ葉月が玄関に登場。

葉月 貴士、消灯時間もうとつくに過ぎてるんだけど。

貴士 あ、ごめん。

葉月 別にいいんだけどさ、こっちに泊まるなら。そうじゃないなら、私が寝付くまで
に家に戻ってくれる？ あんたがドンくさいから、明日から私が船の整備しない
といけないんですよ。だったらしっかり睡眠とりたいんだけど。あんたがガサガ
サ家に帰ってきたらまた目が覚めるから。

貴士 そんなガサガサとかしてないでしょ。

葉月 してるよ。昨日もそれで目が覚めたんだから。ほんとイラっとするから。

千早 葉月さん、すみません、遅くまで引き止めちゃって。

葉月 いいんですよー。こんな弟で良かったたら、もういつでも、むしろ永久に引き
取って頂きたいくらいなんですけど、

貴士 もういいから。じゃあ、今日は、もう寝ます。おやすみなさい。
千早 おやすみなさい。

葉月と貴士、玄関から外へ出て立ち去る。
環希が二階から降りてくる。第一幕で着ていた服を着ている。
耳に片方だけピアスをしている。

千早 …あれ、環希さん。

環希 こんばんは。

千早 こんばんは。その服。

環希 これいいでしょ。とってあったんですよ。

環希、姿見の前に立つ。

千早 だよ。私見たことない。(ピアスについて)それは。
環希 今は片方しかないんですけどね。

環希が振り返ると確かにピアスは片方しかない。

環希 少しいいですか？

千早 いいけど。なに。

環希 しばらく大人しくしてると思ったら、次は、貴士さんですか。

千早 え？

環希 千早さんって、ほんと何でも有りなんですわね。

千早 …何か、怒ってる？

環希 いえいえ、むしろ助かりました。お陰で準備がスムーズにできましたから。船を動かせる人がいないと話にならないので。実はですね、貴士さんか葉月さん、どちらかを千早さんがさっさと籠絡してくれないかなと思っていたくらいなんですから。

千早 私のこと何だと思ってるんですか？

環希 だってそういう人でしょ。

千早 …それで、環希さんこそ、こんな夜中にどうしたの？

環希 いやー、準備もほぼ終わりましたし、そろそろ消えようと思って。

千早 …。

環希 具体的にはそうですね、ほら、あそこに岬が見えるでしょ。奈津に教えてもらったんです。あの崖の下、今の時間帯から海流が沖に流れるんです。結構なスピー

ドで川みたいになるって。私は、この島を出るわけにはいかないんですよ。私が残ると他にも残るっていう子が出て来るので、これが一番いいんです。

千早 ……どうして？

環希 イモおじさん、病死じゃないんですよ。…私だけで満足しておけば良かったのに、人間って欲深いですね。あー、これは私以外に手を出すのも時間の問題だなんて思ってたんですよ。こんな島に私たちとあいつ一人でしたから。ほんと信用できないって思ってた。それで。方法は聞きたかったらお教えしますけど。それを話しておいた方がリアルで信じてもらえますかね。あんまり思い出したくないですけど。…私の話、きいてます？

千早 きいてるけど。

環希 だから私もそろそろ消えようと思って。正当防衛だって考え方もあるかもしれないですけど、実際にそうでしたし。ただ私の中の正義が許さないんですよ。もっと別の道もあったんじゃないかって。安易な道を選んでしまったんじゃないかって、思うんですよ。

千早 罰してほしいのね、環希さんは。

環希 まあそういうことになるんですかね。「あなたが裁くとおりに、あなたも裁かれ、あなたの量るとおりに、あなたも量られるだろう」『尺には尺を』ってやつです。あとまあちよつと疲れたっていうのもあります。みんなといるのが。たぶん今日がギリギリの日程なんですよ。私が本当に消えたっていうことをみんなが納得してくれる時間が必要ですから。

千早 織江さんは納得するかな。

環希 一応、手紙は書いてあります。遺書みたいなものですね。

千早 何で私に？

環希 千早さんだったらちゃんと言えてくれると思ったので。みんなに。

千早 ずいぶん信用されてるのね。

環希 私たちは少し似てますから、たぶん。私は千早さんほど徹底できてませんけど。ほんとは、どうでもいいと思ってるでしょ、全てのことを。他人のことも、自分のことも、

千早 うーん、言われてみればそうかもしれない。

環希 自覚ないんですか？

千早 自分でもわかっているつもりなんですけど、私は他の人とは少し違うって。人を好きになったり、嫌いになったり、そういうのがわからない。ただ、相手の求めていることはわかる。だからそれをしてあげるの。

環希 ロボットみたいですね。

千早 そうかもしれない。私、ロボットなのかな。

環希　ほんと羨ましいですよ。私もそんな風になってみたかったな。さてと、じゃあ、もう行きますね。

環希、立ち上がる。玄関へ。

千早　ねえ、私も一緒に行こうか？

環希　私の話、聞いてました？

千早　きいてたよ。だから。最後一人じゃ寂しくない？

環希　いえ、一人で大丈夫です。そういうところなんですよね、千早さんのヤバいところは。

環希、庭に出る。

環希　それじゃ、お元気で。最後に千早さんと話せてよかったです。

千早　私も。

環希　みんなのことお願いしますね。

千早　いいよ、やってみる。それが環希さんの望みなら。

環希、浜辺の方に立ち去る。

千早　…さようなら。環希さん。

暗転。

第六幕

秋。出発の日。夕刻。

民宿のロビーには旅立ちの準備を終えた織江、万里、円佳、純奈、美波、梨香子、綾乃、千早、葉月、貴士。それぞれの手荷物など。

記念撮影のためのカメラと三脚。カメラを操作してるのは純奈。

綾乃はアンジェロの衣装を着ている。

姿見の前には、貴士と円佳と千早、貴士は円佳からもらったスカートを履いている。

貴士

本当にいいんですか？

円佳 私もう着ないから。

貴士 ありがとうございます。

千早 よかったね。

純奈 はい、じゃあそこに並んでください。みんないますよね？

みんな記念撮影のためにカラオケ大会用の舞台に集まる。

織江 奈津がいないけど。

万里 何してるんだろ。もう集合時間なのに。

純奈 まさか、まだ釣りしてるんじゃないでしょうね。

美波 そういえば、今朝、最後の日だから行くって言ってたけど。

綾乃 奈津ならさっき戻って来てたよ。部屋で道具片付けると思う。

純奈 (二階に向かって) 奈津！

奈津 (声) はい、すぐ行きまーす。

織江 葉月さんと貴士さんも入ってください。

綾乃 そうですよ。

葉月 でも、私たち演劇部じゃないし。みなさんだけで。

円佳 (千早を示して) 演劇部じゃない人、もう入ってますから。

千早 そうそう。

綾乃 それに貴士さんは、もはやうちの看板俳優ですから。これからもよろしくお願ひ
しますね。

貴士 はあ。

綾乃 そして、私の中ではお姉様にもそのうちいろいろやってもらおう予定になっていま
すので。

葉月 え？ ええ？

綾乃 まあまあまあ、どうぞどうぞ。

などと言いながら綾乃たち、貴士と葉月を並びに入れる。

奈津が大量の釣り道具を携えて二階から降りてくる。

純奈 奈津、早く。みんな待ってるから。

奈津 ごめんごめん。

奈津、釣り道具を置くと並びに入る。

純奈 タイマーで撮るからねー。三十秒後。

純奈、カメラのタイマーのスイッチを入れると、並びに入る。

純奈 松女ポーズで！

みんなで松女ポーズ。千早、貴士、葉月も教えてもらおう。

円佳 あのカメラ懐かしいわ。演劇部の備品だよな。

万里 そういえば。

純奈 久しぶりなので電源が入るか不安だったんですけど。

万里 もしかして、SDカードも入ってる？

純奈 入ってますよ。先輩方の三年間の記録も。『BLハムレット』から引退公演まで。

円佳 そんなの残ってたんだ。

千早 え、見たい。

織江 見なくていいですよ。

千早 え、何で。

貴士 私も見たいです。

純奈 じゃあ後でみんなで。

万里 ていうか、三十秒って長くない。

梨香子 長いですね。

奈津 長いといえば、三年間と一年七カ月、織江さん、万里さん、円佳さん、お疲れさまでした。

円佳 何急に。

奈津 いやー、一応、一区切りじゃないですか。

万里 確かに、長かったよな。

梨香子 そうですか？ 私ほけっこうあつという間でしたけど、いろいろありましたし。

カメラのランプが点灯し音がする。

純奈 あ、もうすぐですよ。

みんな、ポーズ。

カメラのシャッター音。

みんな、写真を撮り終え、やれやれといった感じで列から離れる。

純奈 五秒後にもう一回シャッターがおりまーす。

みんな ええっ？

みんな、慌てて戻って来てポーズ。
カメラのシャッター音。

純奈 そして五秒後にもう一回シャッターがおりまーす。

万里 何枚撮るの？

純奈 これが最後でーす。

みんな、ポーズを変える。

カメラのシャッター音。

純奈 はい、お疲れさまでしたー。

梨香子 もう、純奈、何枚撮るか最初に言っておいてよ。

純奈 ごめんごめん。

などと言いながら純奈、カメラと三脚を片付ける。

葉月 貴士、私、忘れ物したからこれ持って先に行っといてくれる？

貴士 ああ、うん。

葉月、手荷物を貴士に預ける。

奈津 (釣り具の山を示して) 葉月さん、これくらいならまだ乗りますよね。

葉月 まだ余裕あると思いますよ。貴士、見てあげてくれる？

貴士 大丈夫じゃないですかね。

葉月、二階へ立ち去る。

円佳 それ全部、持って行くの？

奈津 貴重な資源だから持って行くようになって、環希さんのメモに。確かに、グラスフ
アイバーのロッドやナイロンの糸をもう一度、人類が作れるようになるまでには
相当、時間がかかると思いますね。

奈津、玄関へ。

梨香子 綾乃も何その格好？

綾乃 これは環希さんのメモに、はなかつたんですけど、今後、文明が衰退していくことを考えると、演劇が代表的な娯楽に返り咲く可能性が高いと思うんですよ。だからこの島で作った衣装や小道具を持って行くことにしました。

綾乃、玄関へ。

円佳 だからって着て行かなくても。

奈津 荷物多いんで、先に行きますね。

綾乃 私も。

純奈 あーちょっと待って、私も行くから。織江さん、あの二人だけだと心配なので私も行きますね。

織江 お願い。

純奈 環希さんのノートは？

織江 私持ってる。

純奈 じゃあ、あとお願いします。ちょっと待ちなさいよ、勝手に変なところにそれ置かれたら困るんだから。

奈津 逃げろー！

などと言いながら奈津と綾乃と純奈、庭を通って港の方へ立ち去る。

万里 純奈、元気になってよかったよな。責任感じてたみたいだから。何か話した？

織江 私じゃなくて、千早さん。千早さん、どうやったんですか？

千早 え？

織江 純奈のことですよ。ほら、いつかの夜、千早さんと話して、あの子もふっきれたみたいで。助かりました。いつまでもグズグズ泣かれても困りますからね。

千早 私は、別になにも。

織江 何もってことはないでしょ。

千早 うーん、聞きたい？

織江 そうですね。

千早 実は織江さんにも大事な話があるのよね。

織江 何ですか？

千早 それはまた後で。船に乗ってから。貴士、頼んでた例のあれ、船に積んでくれたよね。

貴士 え？ ああ、はい。でもあれ何ですか？

などと言いながら千早と貴士、玄関へ。

千早 まだ秘密。私たち、先行きますね。

織江 はい。

千早と貴士が庭を通りかかったところで、

織江 貴士さん、私もすぐ行きますけど、念のため船の最終確認お願いできますか？
貴士 わかりました。

千早と貴士、連れ立って港の方へ立ち去る。

梨香子 あーあ、で、結局、貴士かよ。

万里 そう？ 私けっこうお似合いだと思っただけど。

円佳 わかる。私、あの二人なら応援できるかも。

梨香子 えー、そうですか、私は納得いかないなあ。

織江 美波、戸締りお願いね。

美波 はい。

織江 これで確認してくれる？ チェック事項、最後のページに全部書いてあるから。
美波 わかりました。

美波、ノートを受け取るとカウンターの奥のバックヤードへ。

織江 ほら、その元カノトリオも早く準備して、置いてくよ。

円佳 誰が元カノトリオって？

織江、玄関から庭に出て庭にまわる。

織江 みんな遅れないようにね。

三人 はい。

織江、港の方へ立ち去る。

梨香子 …織江さんこそ、大丈夫なんですかね。

万里 とりえあず大丈夫じゃない？ ああやって何かやってる方が気がまぎれるだろうし。

梨香子　　そうですね。

万里　　それにしても、最後まで環希らしいよ。私たちにちゃんと時間をくれたんだから。気持ちを整理する時間。

円佳　　どんぴしゃだったもんね、出発の予定日。

万里　　そう、一か月後の今日あたりが理想的だって、書き残して行っちゃうんだもんね。梨香子　　今朝も織江さん、探してましたよ。散歩とか言っていましたけど。

万里　　まあ、それはそうだろうね。

カウンターの奥からブレイカーの落ちる音。ロビーの明かりが消える。

夕日が射しこんでくる。美波、戻って来る。

美波　　チェック終わりました。ブレイカーも落としたので、これ以後は出るだけです。
万里　　お疲れ様。

葉月、二階から花束を手に戻って来る。

葉月　　：万里さん、これどうしましょうか。

万里　　どうしましょうかねえ。

円佳　　結局、言い出せなかったよね。

万里　　いやー、無理でしょ。

葉月　　私も機会をうかがってたんですけど。

万里　　そういう空気じゃなかったですから。ほんとにはみんなであの岬に行きたかったんですけど。

円佳　　ここでいいんじゃない。ほら、ここ、環希がいつも座ってた席だし。

万里　　そうする？

葉月　　ここでいいですか？

万里　　はい。

葉月、花束を環希の席に置く。

円佳　　手とか合わせた方がいいのかな。

万里　　どうだろ。

万里と円佳と梨香子と美波と葉月、手を合わせる。

梨香子　　：私、環希さんのことマジで許せません。何でこんなことになったんですかね。

そんなに私たちのこと信用できなかったんですかね。何があっても環希さんは環希さんじゃないですか。

葉月 …すみません。

円佳 葉月さんが謝ることじゃないですから。ほんとでも。

万里 そうそう、それに、それも環希の計画のうちだったみたいですよ。

葉月 それ？

万里 負い目みたいなものを葉月さんや貴土さんに。お二人だけじゃなくて、私たちに。それがこれから先、必要になるって、千早さんが。

梨香子 意味がわからないんですけど。

万里 そうか？ 私は少しわかる気がするけどな。

梨香子 そんなの知らないから、私は環希さんに生きていてほしかったです。

港から汽笛の音が聞こえる。

美波 呼んでますね。

葉月 もう時間ですね。

円佳 行く？

万里 行きますか。

万里、円佳、梨香子、葉月、美波、戸締りをして玄関から出て庭にまわる。

万里 (外から民宿の中に向かって)じゃあね、環希、また来るから。

梨香子 また来れるんですか？

万里 わかんないけどさ。

葉月 いつかまた来れるんじゃないですか。みなさんまだ若いんですから。

円佳 葉月さんもそんなに変わらないでしょ。

葉月 そう、だからまたいつかね。

万里、円佳、梨香子、葉月、美波、港の方へ立ち去る。

汽笛の音が聞こえる。ゆっくりと日が暮れてゆく。夜になる。

無人のはずの真つ暗な民宿のロビー。波の音。

一階の廊下の奥から蝋燭の明かりが近づいてくる。

織江が燭台を立てたお盆を運んで来る。お盆をテーブルの上に置くと、花束をカウスターにある花瓶に生ける。

織江、席に着くと二人分の食器を並べる。飲み物を用意する。幾つか缶詰を取り出すと、缶切りで開けはじめ。質素な晩餐の準備の様だ。そこへ、誰かが浜辺の方角から庭に入って来る。玄関を通ってロビーへ。はじめは、暗くて顔がよく見えない。

織江　：幽霊じゃないでしょうね。

環希　幽霊みたいなものかもしれないよ。

織江　足は、あるみたい。

環希　何で行かなかったの？

織江　一人じゃ寂しいと思って。

環希　馬鹿じゃないの。

織江　思ったんだよね。環希は責任感が強いから、みんながこの島を出るのを見届ける

までは、死ぬわけないって。どこに隠れてたの？

環希　あんたに見つからないところ。

織江　けっこう探したんだけどな。

環希　千早さんね。あの人を信用したのが間違いだった。

織江　千早さんはヒントをくれただけ。決めたのは私だから。

環希　私に本当に死んでたらどうするつもりだったの？

織江　その時はその時。あと、これもまだ返してなかったよね、イヤリング。あの日、

浜辺に落ちてたの。環希が何をしたのか私にはすぐわかった。

環希　ああそう。

環希、席に着く。

環希　慣れないことはするものじゃないな。

織江　それはどっちのこと？

環希　両方。やれやれ、やっと一人になれると思ったのに。

織江　ごめんね。これ食べる？　お腹減ってるでしょ。

環希　無駄遣いしないでよ。ここにはもう何も残ってないんだから。

織江　いいじゃない、今日くらい。ほら、コーラーもあるよ。最後の一本。

環希　あのさ、わかってる？　もう誰もこの島に来ないかもしれない。あんたも言ってたでしょ、発電機だっていつかは壊れるし、服だってどんどんポロポロになるし、病気になったら治療もできない、ここで、ただこうやって朽ち果てていくんだよ。ほんとにそれでいいの？

織江　私はいい。

環希　あんたはね。

織江 環希は違うの。

環希 私は適当なところでフェードアウトするつもりだったから。

織江 そっか。私がいるとできないね。

環希 最悪。

織江 まあいいじゃない。

環希 何がいいの？

織江、席を立つと環希のそばへ。失くしていた片方のイヤリングを環希の耳につける。

織江 私は、この時間が永遠に続けばいいと思ってる。

環希 …。

環希、蠟燭を吹き消す。暗闇の中で。

環希 (声)あのさ、ほんと早く卒業してくれない？

おしまい

引用箇所

- P 3 23行目～25行目 『以尺報尺』坪内逍遙
- P 4 13行目～15行目 『以尺報尺』坪内逍遙
- P 6 21行目～23行目 『以尺報尺』坪内逍遙
- P 6 36行目～p 7 3行目 『以尺報尺』坪内逍遙
- P 7 14行目～15行目 新約聖書「マタイによる福音書」
- P 2 8 10行目 『颱風』坪内逍遙
- P 3 3 19行目～p 3 4 3行目 『以尺報尺』坪内逍遙
- P 4 1 23行目～28行目 『以尺報尺』坪内逍遙
- P 4 6 19行目～p 4 8 7行目 『以尺報尺』坪内逍遙
- P 5 3 17行目～18行目 新約聖書「マタイによる福音書」